
聞こえない会話

風洞みずいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聞こえない会話

【Nコード】

N9785T

【作者名】

風洞みずいろ

【あらすじ】

学校でいじめを受けてひきこもりになった少年の話。その少年が唯一、外の世界と繋がれる居場所がインターネットの架空の人物たちとのチャットだった。という話です。

第一話

湿気がこもった体臭の匂いが充満している。漫画や小説が散乱している床、いつも常温に保つことの出来るエアコン、カーテンを閉め切ったままの窓、昼間なのに、暗い部屋。液晶の光が暗闇の中で、ぼんやりと光っている家庭用パソコンを立ち上げた。POWERと書いてあるボタンを押すと、起動音が鳴って、画面にWindowsの表示がされる。ユーザーを指定して、デスクトップの液晶画面に夕焼けの壁紙が見えた。僕はインターネットを起動させた。そして、あるホームページへと行く。その左端のツールからチャットという文字をクリックした。文字がずらりと縦に並んだ画面になった。そこには複数の人が入室していた。入室をクリックしてチャットに入る。

マウスを右手で握る。人差し指を使って、クリックする。液晶画面にメッセージが表示される。そこで、僕たちは交流し始める。それは、文字だけの会話。

僕はもう長い間、外に出ていない。僕の部屋のドアには鍵がかかっているから、勝手に誰かが入ることは出来ない。というか僕は二十四時間この部屋にいるわけだから、誰かに入られたら、すぐに気づく。ドアをノックする音が聞こえた。

「優一、ご飯持ってきたわ」

僕の母親の声がする。

「ここに置いておくわね」

母親が完全にいなくなったのを、耳を澄ませて確認してから、鍵をカチリと開けて、食事を摂る。それは、手作りと呼べる物ではない。レトルトのハンバーグだからだ。鍋に水を入れて、沸騰してきたら、パックに入ったハンバーグを入れて、三分経ったら出来上がり。そういう品物。僕の母は働いている。父はいない。僕を女でひとつで育て上げた。否、育て上げられなかったのかもしれない。僕

はこうして所謂、ひきこもりだ。

h i k a r u の発言 こんにちは

僕はキーボードを叩いて返信する。

ゆづの発言 こんにちは

h i k a r u とはひきこもりのインターネットサイトの s t a y
i n d o o r s a n e x c h a n g e で知り合った。僕のネットネ
ームはゆづだ。ネットネームは所謂、通称名だ。ネットの中でだけ
使う名前だ。だから、僕の本名をこの h i k a r u という子は知ら
ないし、僕もこの子の本名も顔も知らない。

話す内容は様々だが、他愛もない会話を続けているだけだ。僕等
は大抵が愚劣極まる愚痴。それがほとんどだ。

彼もひきこもりの少年だったらしい。だから、僕たちは自分た
ちの心の中の思いや、共鳴を覚え易かった。

同じ境遇なのだ。

だからといって、声は出てもいないし、顔も知らない。ただ、
ここにあるものは、画面に映る文字だけだ。それを僕等は追い続け
る。真実なのかも分からないし、そんなことはどうでもいい。

h i k a r u の発言 今日は胃が痛いんだ。頭痛もする。部屋の
中が暑いしな。

ゆづの発言 エアコンつけばいいじゃないか。

h i k a r u の発言 エアコンないんだよ。

h i k a r u の発言 今日、母親が内線をかけてきた。

同じ家に住んでいるのにも関わらず、こうして内線を使うのが、
僕等の常識。

ゆづの発言 そうか。何、言われたんだ？

h i k a r u の発言 ご飯が部屋の前に置いてあるという内容だ
けど、すぐに愛想悪く切られた。むかつく。

ゆづの発言 そうか。それは厭だよな。

こうして、短い文を僕等はやりとりする。

近くの小学校のチャイムの音が鳴る。漠然と思い出す。こんな僕

でも、少し前までは学生だった。

春一番の猛烈な風が吹き止んだ後、暖かい陽気に満ちたあの日、僕は高校の前の正門を潜った。新入生。皆、キラキラとしていた。これから始まる新しい生活に、期待と不安を抱えているように見えるそんな四月。母親は何時にもまして緊張している様子だった。自分の入学式でもないのに、だ。式は無事に終わり、家に帰ったが、入学式の後、僕は季節はずれの風邪をひいた。それから一週間の間学校を休んだ。それが仇となり、友達作りに出遅れた。外の陽気をぼつんとひとり、眺める日々が少し続いた。孤立。だけど、まだ平和だった。

昼休み、ひとりで質素な弁当箱を広げた。

「俺らと一緒に食べない？」

ひとりのクラスメイトが僕に声をかけた。そのクラスメイトの男子の後ろに四角に固まった机があった。ボックス席のように、机を寄せている。僕の方を四つの顔と八つの目が見ていた。口に白米を入れながら。

僕に声をかけたその男子は、その男女グループに所属していた。

僕は自分の机を両手で持ち上げて、四角の群れにドッキングをした。僕はそのグループのお陰で、ひとりではなくなった。

数日後、そのグループのあまり話したことのない、名前も知らない女の子が、授業後の真っ赤に染まる夕方、校舎裏の人気のない場所に呼び寄せた。夕日に照らされている彼女が言った。

「あの、優一君、これ読んで欲しい」

キャラクター物のいかにも女の子っぽい青い色の封筒を渡された。僕は無言で受け取った。

僕は家に帰り、その封筒を開けた。その手紙には、僕のが好きだといった内容が書かれていた。それだけではなく、どうして僕を好きになったのか、ということまでが書かれていて？そういう感情？に無頓着な僕は返事も考えずに、その手紙をゴミ箱へ捨てた。

数日後、学校へ行くと、グループの女の子たちが四人で窓際に固まっていた。羊のように群れている。こちらを見ながら話している。横目で僕を？観察？するかのようになっている。だけど、僕と目が合わないように、一瞬の隙を狙ってちらつと見る。しかし、しっかりと僕を？観察？しているのだ。僕はその行為に気が付いていた。

僕が、放課後に帰宅しようとしているところに、一人の女子生徒が僕に話しかけてきた。

「ねえ、中村君、どういふつもりなの？」

「どういふつもりって何のことについて聞いているのかが分からないんだけど」

「佐和子の手紙のことについてだよ」

僕は一瞬、戸惑った。もう、忘れかけていた。思い出すまでに数秒を要してしまった。あの気の弱そうな女の子からの手紙のことかと僕は思い出した。

「あ、ああ。あの手紙のことだね。それが、どうかしたのか？」

「あんた、何を言ってるのよ。返事くらいしなさいよ」

こいつはあの気の弱そうな佐和子という女の子とは、対照的な性格だなと僕は思った。

「それは、ごめん。でも、僕もああいうものをもらっても困るんだ。悪いけど、僕は考えられないな」

「中村君、そういう言い方はないんじゃないの？」

「じゃあ、他にどういふ言い方をすればいいんだ？」

教室の後方の扉の窓から、あの佐和子という女の子の黒い髪の毛が見えた。震えている、頭が震えている。あの、気の強そうなポニーテールを揺らした目の前の女の子の瞳も震えている。僕はうんざりした。

「悪いけど、今日は塾の日なんだ。もう出ないと遅れる。本当に悪いけど、後ろにいるあの子にも伝えておいて」

僕はポニーテールの女の子の肩を叩いて教室を出た。佐和子ともすれ違ったけど、目は合わなかった。

その次の朝、あの張り詰めた教室が現れた。それが女の子たちの間だけではなく、男子の方にもで噂になっていた。僕を見ながら小声で話している声が聞こえる。僕は椅子を引いて席に座った。

完全に僕はクラスメイトから隔離されていたのだ。教室の後ろの僕のロッカーには沢山のプリントが詰め込まれていたりした。

その日から僕はイジメラレッコになったのだ。

僕はすぐに不登校児となり、このひきこもり生活が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9785t/>

聞こえない会話

2011年6月10日22時40分発行